図書館報

★　第６３号
★　兵庫県立三木東高等学校　総務部　発行

「本と出会う」

A

子どもの頃から高校生まではほとんど読書をすることはなかった。落ち着いて本を読むということが性に合わなかったからだ。だから、毎年夏休みに課される読書感想文が苦痛でたまらなかった。

そんな自分が自然と本を手に取り、活字に向かいだしたのは、大学に入学して少し時間に余裕が生まれた頃だった。その頃は、特技の野球に関するものや心理学、そして教育に関わる本をよく読んだ記憶がある。知識が増えることや深く考えさせられるテーマに直面することで、読書というものの面白さを知ることができた。

２０～３０代の頃は、主に自己啓発本を読み漁った。自分に自信が持てず、なりたい自分に近づくために、試行錯誤を繰り返し必死にもがいていたように思う。その頃に出会った本の影響は大きかった。小説にも手を伸ばすようになっていた。主人公の世界観に浸ったり、登場人物に感情移入してみたり。小説の世界に身を置くことが心地よかった。疲れた心や頭を癒してくれたと思う。休みの日には、自分にとって必要な本との出会いを求めて本屋さんに出かけるようになっていた。

４０代になってからは、近くの図書館へも立ち寄るようになった。自分が求める類の本に出会うために。予め、読みたい本を求めてではなく、あくまで偶然の出会いを求めて。その時の自分の調子や心理状態で、１０冊近く借りる時もあれば、１冊も借りないこともあった。

５０代になった今、関心は尊敬する著名人の人生訓や哲学に向く。謙虚な気持ちになって、未熟な自分を顧みることができ、学べることが非常に多い。休みの日の昼下がりに、ゆったりとした気持ちで読書できることがこの上なく贅沢な時間になっている。なりたい自分に近づく努力はこれからも続けたいと思っている。

もともとは読書嫌いだった自分が、いろいろな本との出会いによって、読書の魅力を知れたことは大きいと実感している。３人の息子たちが読書好きに育ってくれていることも嬉しい限りだ。これからの人生も素晴らしい本との出会いによって、きっと豊かなものにできるのではないかと期待している。老後は、晴耕雨読の生活もいいかなと少し憧れを抱き始めている。

「今夜は眠れない」

B

大学卒業時に友達と卒業旅行に行こうと計画を立てていたが、年末に体調を崩し、飛行機に乗っての海外の旅行はやめておいたほうがいいと医者から言われ、私は一人、国内を当てもなく、車で旅することにした。寝袋を含め、衣類や生活用品を積み込んで、その日暮らしで、２週間で西日本を一周することにした。宿が取れず、仕方なく夜中も車を走らせながらラジオを聴いているとＮＨＫの放送でラジオドラマが流れていた。とても面白くて、毎晩楽しみに聞いていた。原作は宮部みゆきの「今夜は眠れない」、なぜか宿が取れず、車を走らせている自分にぴったりのタイトルでもある。２週間の旅行を終えてすぐに本屋で購入した。やっぱり面白い、続編の「夢にも思わない」も購入し、一気に読んだ。その時、本ってこんなに面白いんだと思った。今でも時間を作って本を読んでいる。

「本が広めてくれる世界」

C

私と本との出会いは絵本です。幼少期から祖母に絵本を読んでもらうのが大好きで、何度も何度も読んでほしいとせがんで、祖母を困らせたそうです。しかけ絵本を買ってもらった時はとてもうれしかったことも記憶に残っています。この時に読んでもらっていた絵本が今でも読み継がれており、時代が変化してもいい本は変わらないのだとあらためて思います。

仏像が好きで、いろいろな寺をまわっている時に、法隆寺の解体修理を手掛けた宮大工棟梁西岡常一さんの本に出会いました。ただ太い立派な木を使えばよいというのではなく、木と会話しながら木の癖を見抜いて使う。日当たりの悪い建物の北側には北側で育った木が、南側の日当たりのよい場所には、南側で育った木が適している。それ以外にも細かな先人の知恵が生かされていて、それを１つ１つ丁寧に解明し、復元していった様子に感動しました。この本を読んでからは、古い建造物を見る見方も変わり、さらに興味が深まり、本との出会いに感謝しています。

「本を読んで」

D

私が積極的に本を読み始めたのは、中学二年生の夏休みの終わりくらいだったと思います。国語の成績が悪く、父親から「本を読みなさい」と言われて始めました。手始めに家の本棚にあった推理小説を読みました。当時から、理数系に興味があったのも要因なのか推理小説にすぐくはまりました。そこから古本屋で買い、学校の図書館も利用して本を読むことが生活の一部になりました。

今でもなるべく、週に一冊は読めるように時間を作っています。最近では、数学の歴史に関する本を読むことにはまっています。数学という学問がどのような歴史をたどって発展してきたのか、定理や公式を発見する裏側にはどのような背景があったのかなど、興味が尽きることがありません。数学の定理や公式は、一度証明が成立すると、

後世でも覆ることがないところが魅力です。ただ公式を覚えるのではなく、どのような過程で、どのような考えで作られているかに興味を持ってくれると数学を教える者として嬉しいです。

先ずは、身近なテーマや興味のある分野から手を出してみて下さい。読み始める一歩を踏み出すことが大切です。

「きっかけ」

E

ＮＨＫ大河ドラマ「青天を衝け」が面白い。日本の近代化を進めた渋沢栄一が主人公だが、前半は、幕末、若き栄一が当時流行していた「尊王攘夷」という思想にどう向き合ってきたかが物語の中心をなしている。

「渋沢栄一」とは、明治から大正にかけて活躍した実業家で、「日本資本主義の父」と称される人である。また、令和六年度発行予定の新一万円札の肖像に採用される人でもある。私自身は、彼の名前くらいある程度知っていたが、特に、彼に関してもっと詳しく知ろうとは思っていなかった。しかし、このドラマをきっかけに、私は、彼にまつわる本を読むようになった。その本の一つに「渋沢栄一　君は、何のために働くのか　絶対に後悔しない働き方、幸せになる働き方」竹内均（編者）渋沢栄一（原作）がある。その中で、編者の竹内氏が、渋沢栄一の『論語と算盤』の内容に基づき、経営者の心得について述べている。経営者の心得とあるが、経営者のみならず、労働者にとっても、幸せに仕事をしていく上で大切なこととは何か、そして、それをいかにして成し遂げることができるかの問いに、十分納得できる答えを教示してくれた本だ。

ＴＶドラマをきっかけに、私は、渋沢という人物に興味を持ち、渋沢をもっと知るために彼の本を読みたいという願望が生まれた。私の最近の読書量は極端に少なく、恥ずかしい限りだが、今後の日常生活の中で、なにげない「きっかけ」を作って読書に専念したいものである。

「私が出会った作家」

F

私が過去に読んだ小説で、その小説を執筆した作家と実際に出会った事があります。その作家さんは、湊かなえ先生です。（作家名はペンネームですよ。）

湊先生は、作家になる前は教員をされていて、十四年前に私が淡路島の高校で非常勤講師をしていた時に、講師席で互いに向かい合わせでした。

先生との会話のやり取りで一番印象に残っているのは、この時期に放送されていたドラマで、小学生の少年が「どうして１＋１は２なの？」という疑問を担任の先生に質問するという場面があり、この内容について大変興味深く議論したことです。

翌年、先生は島内の別の高校に替わられ、一緒にお仕事をしたのはこの一年間のみでした。この年に、ミステリー小説『告白』を発刊し、作家デビューしました。実際に『告白』を読み、温和な性格である印象だった先生のイメージが、学校現場を舞台とした殺人に関する内容に大変衝撃を受けました。

今回の寄稿を機会に、最近私は『ブロードキャスト』『ドキュメント』の２冊を読みました。『告白』とはまた違う雰囲気で書かれた、高校の放送部の小説です。ぜひ皆さんにも読んでもらいたいと思います。

「本と会話する」

G

今までにたくさんの本を読んできました。と言えたら、今回のような本をテーマにした内容にも説得力があったのかもしれません。むしろ私は本を全く読まないほうだと思います。ですが、ここ最近、そんな私でも本に触れる機会がありました。なんと、友人が本を出版したのです。今まで知人が執筆した本を読んだことがなかったので、とても新鮮でした。本にはその人の価値観がたくさん詰まっています。読み終えた時には著者と何時間も話しあった後のような達成感さえも覚えました。

読書初心者ではありますが、時々こうして本を読み、著者や自分と向き合う時間も必要だと感じています。今年度に入り、1ケ月に1冊を目標に読書をするようになりました。

ここ最近は色々と、会話や活動の自粛が求められ、制限される時世です。普段本を読まない人達も、これを機会に読書を始め、著者や自分と向き合ってみてはいかがでしょうか。

「読書と私　ビフォー&アフター」

H

一学期の終業式に配布されたpTA会報「いぶき」の新着任職員紹介のコーナーで、私のマイブームの一つが「小説」となっていました。実は、原稿には、「原田マハさんの小説」と書いていました。特に好きな作品は「奇跡の人」と「リーチ先生」です。

「高校時代に読めたらよかったのに」と思う本は、あさ出版の「日本でいちばん大切にしたい会社」のシリーズです。お店の人たちの接客や雰囲気が素晴らしい丹波市の某フランス料理店が紹介されていると知り買ったのが、この本との出会いです。働く意味や企業が社会にできることを教えてくれた本です。

今は読書が大好きな私ですが、大学時代は読書が楽しめず、知識豊富な京大生の友人に相談したところ、次の助言をもらい、変わりました。㈠読みやすくて楽しく読める本を読む。㈡途中で嫌になったら別の本を読む。

十数年前、私は特別支援教育士（S. E. N. S）という資格を取得したのですが、関連する研修で「語彙は読書によって増やせる」と聞きました。実際私も、軽い本から読み始め、「楽しむ読書」を続けた結果、大学時代なら眠くなり読めなかったような本を今では楽しく読めます。自分でも「驚き」です。

最後に…ネットで無料で読めるものと、有料の本では、書き手の責任感が違うそうです。その責任感が情報の信頼度を高めるのですね。

「本は世界を鮮やかにする」

I

私が最初にハマった本は、父親がくれた「宇宙の神秘」なる本だった。小説などの活字ばかりのものでは全然なく、色鮮やかな写真やイラストに申し訳程度に説明書きがついているものだった。目を引く写真やイラストに知らず知らずのうちにのめりこみ、自分の勉強机の本棚を長い間独占していた。今まではテレビなどで目にしてもスルーしていた宇宙のことがいつのまにか自分の中で注目するべき存在になっていた。そして、年を経るごとに自分の読める内容の本が増えていき、その読んだ本に伴って自分が意識をせずとも目を留めるものが多くなっていった。気づいた時には世界は様々な興味を引くものがあふれていた。無色の世界からいろんな色があふれる世界に変わっていった。

読書は世界を広めてくれるとはよく聞くが、さらにそれに加えて「気づき」の力を与えてくれる。今からでも遅くはない。活字ばかりの本じゃなくてもいい。是非、本を手にとって世界の広さを、果てしない深さを、あふれる色彩を感じてほしい。

「なくてもいいもの？」

J

昨年から私たちはたくさんの我慢を強いられてきた。特に、不要不急の名の下で、様々なイベントはことごとく中止になった。バンドとお笑いのライブを生きがいにしていた私は打ちひしがれた。エンターテインメントは、私の好きなものは、なくてもいいものなのだろうか…

そんな思いを抱えながら、自粛期間中の私はもともと好きだった読書にふけった。本も読んだところで何の役にも立たないという言葉が頭をかすめる。しかし、幾度となく読んだお気に入りの小説は、私の心を温めてくれた。新しく出会ったエッセイ本は一度も訪れたことのない異国の旅へと誘った。この時に読んだ本で印象に残っているのは、小川洋子著『密やかな結晶』である。記憶狩りによって、周囲からものとそれにまつわる記憶が次々と消えてしまうという小説で、読み進めるうちに、大切なものが消えてしまうかもしれない恐ろしさと悲しさを感じた。それと同時に、自分にとって大切なものは何だろうと考えるきっかけになった。

コロナ禍で、心を豊かにしてくれるものが必要不可欠であると改めて感じた。これからも、わくわくしながらページをめくる時間を大切にしていきたい。

「読書の思い出」

K

読書量が減ったと痛感する日々を送っている。国語科担当としては非常にまずいと危機感を抱いている。

子どもの頃から本が好きだった。祖母宅が寺で、大きな書庫があり、その書庫に座り込んで本を読むのが楽しみだった。時間を忘れ目についた本を読み耽った。また父が通勤時に読む本をこっそり読むこともあった。大人の世界を垣間見たような気分になったのを覚えている。大学では勉強のために専門分野の国文学の本を読む傍ら、かけ離れた世界の本が読みたくて海外ミステリーに夢中になった。アガサ・クリスティーを読破してから、早川ミステリ文庫やジェフリー・アーチャーの作品を読み漁った。

今振り返ると私がこの職に就いたのは子どもの頃からの読書ゆえだと思う。この夏は時間を捻出して、読書に耽る余裕を持ちたい。まずは昔読んでもう一度読もうと買ってある『罪と罰』を読み返そう。

「印象に残った本」

L

印象に残った本はたくさんありますがそのうちの三冊を紹介します。

一冊目は「オイラーの贈物」です。

高校数学でもおなじみの「パスカルの三角形」や「三角関数」、「指数関数・対数関数」、「ベクトル」、「微分」、「積分」などの話から数学における最も美しい定理とも評される「オイラーの等式」の話が載っています。

二冊目は「数学が面白くなる東大のディープな数学」です。

東大数学の特徴の一つに、「基本問題の難問」が挙げられます。

例えば、教科書に載っている公式を定義からきちんと組み立てて証明する問題は簡単なようで最後までたどり着くことが難しい。また、煩雑な場合分けの問題は、いかに単純化するかがカギとなり、そこには論理的思考力が試されます。この本を読むと今まで数学の問題をただ単に解いていただけということを思い知らされました。東大数学の本質を知ることで、入試問題

に隠された数学の奥深さを体験することができます。

三冊目は「応仁の乱」戦国時代を生んだ大乱です。数年前話題になった本なので歴史好きな人なら読んだことがあるかもしれません。

内藤湖南先生が「大体今日の日本を知る為に日本の歴史を研究するには、古代の歴史を研究する必要は殆どありませぬ、応仁の乱以後の歴史を知って居ったらそれで沢山です。」と主張された応仁の乱は、歴史年号としては知らぬ者はいないくらい有名ですが、内容についてはよくわからない人が多いと思います。ざっくり知られているのは「室町幕府が衰退し、戦国時代のきっかけになった」というくらいで、開戦に至った理由や目的など詳しいことになると「？」ではないかと思います。

この本では背景となる出来事から扱っているので、名前は知っているけれど、中身はよくわからないという人はこの本を読んでスッキリしてください。

内容は少し難しいものばかりですが、じっくり読みこめば、高校生でも理解できるレベルの話だと思います。

「頭の中で旅をする」

M

みなさんにとって本とはどのようなものでしょうか。

高校時代は推理小説にはまり、授業と授業の間、昼休み、放課後。とにかく時間がある時は本を読んでいました。一度読み始めると途中でやめることができない性格で、国語の授業で扱った作品も、授業が待ちきれず最後まで読んでしまうことがほとんどでした。今でも本を読むときは「今日は一日これを読みきる」と意気込み、読み始めます。読書と聞くとなんとなく、通学、通勤時間に読むもの、暇つぶしというイメージがありませんか。私は読書とは旅行だと思っています。本を買うために出かけるとか、本を読みながら旅をする、というわけではなく、「頭の中で旅をする」のです。自分が住む世界とは違った場所での話、自分が出会ったことのない人との出会い。そういったものを味わうことができる、経験することができるのが読書だと思います。そんな風に考えると読書するのが楽しくなってきませんか。みなさんにとって本がどのようなものか、また教えてください。私は「本を読んでおけばよかった。」と後悔する場面もあります。高校生の今でも遅くないので、自分のお気に入りの本を見つけてください。人生を変える一冊に出会うかもしれません。本のある充実した高校生活になりますように。

「ライフアイテム」

N

私は読書が大好きです。難しい書籍は苦手ですが、ジャンル問わず子供の頃から何かしら読んでいました。漫画も大好きですし、今でも必ず書店に出向いて面白いものはないかと探します。特にミステリー小説は大好きで、ハマってしまうと時間を忘れて読み続けてしまいます（時効で許されると思うので白状しますが、学生の時、ハマっていた小説の結末が気になりすぎて授業中に続きを読んでしまったり。先生、ごめんなさい！）

前任校で、図書室で司書を担当していたのですが、悩み事を打ち明けに来てくれる生徒が多くて。その時期は、みんなの友達関係やプライベートな悩み、勉強や受験に対する悩みなど、少しでも手助けになるような本を選んで、お薦めする機会が増えていました。

特に印象に残っているのが、ある女子生徒で、登校出来た時には必ず図書室に来て話をしていました。「この本、結構読みやすいし、同じように悩んでる人

のこと書いてるから読んでみ？」と薦めた本があり、なるほどと共感できる所が多かったので試しに読んでみてと。後日、「先生、この本めっちゃ良かった！自分でも買う！話聞いてくれたのとこの本で迷ってた進路決めた！」と言ってくれたことを今でも覚えています。私も読むことでお薦めすることが出来た事実は間違ってなかったんだなと、勉強にもなりました。

学生時代に読んだ本は、大人になっても覚えているもんです。是非皆さんも思い出に残るステキな本に出会ってほしいと思います。

※参考書籍　「１０代のための 疲れた心が　ラクになる本」

「あのときに読んでおいてよかった」

O

私は今、本をほとんど読んでいません。幼い頃、父親が「本を読め」と頼んでもないのに、文庫本の山を買って渡してきました。私は、文庫本のビジュアルと活字の量に圧倒され、しばらく本を開くことはありませんでした。

中学生になり、小学生と同様、読書感想文の宿題が課されました。私にとって読書感想文はおっくうなもので、いつも後回しにしていました。お盆過ぎ、重い腰をあげた私は、父からもらった本から適当な題材を探しました。当時から見栄っ張りであった私は、背伸びをして太宰治の「人間失格」を手に取りました。読んだ第一印象、「とにかく暗い。」その後、感想文を書く気にもなれないくらいのなげやりな気持ちになりました。当時の私には刺激が強すぎたのかもしれません。しかし、中学生の時分にあの作品を読む、いや、目を通すに近いですが、触れることができたことは貴重な経験です。今、読むべき作品は何か、思いを馳せつつ、筆をおきたいと思います。最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

「本は一冊の【世界】」

P

私は、物心がついた時から本に触れていました。幼い頃、母に読んでもらった絵本の内容や、図鑑を読み漁って覚えた昆虫や魚、恐竜の名前を今でもぼんやりと覚えています。

それから、世界史のマンガや伝記、世界遺産のガイドブックを読んでは考古学者になりたいと言い、宇宙の最新の発見が特集されている雑誌を読んだり星の図鑑を眺めては、ＪＡＸＡに就職したいと言い出すような本に影響されやすい少年になっていました。

結局、中学から始めたバレーボールが楽しく、高校、大学とバレーボールで進学した為、小さい頃からの夢とは離れた人生を歩むことになりましたが、それでも本は私の生活のすぐそばにありました。遠征によるバス移動の時間や宿舎での暇を潰すためにライトノベルをよく読んでいました。ライトノベルにも影響を受け、活躍しているシーンを読んだ後は自分のパフォーマンスもつられて向上していました。

このように、本の影響を受ける体験は、皆さんも一度はあるかと思いますが、私は、これは重要なことだと考えています。読書に熱中している時、その本の世界を想像し、入り込むことができます。今では３Ｄ映像やＶＲで仮想現実を楽しめますが、自分で読みながら想像して作り上げた世界はそれにも劣らないものです。

新しい世界の体験は、時に新しい物への興味を抱かせ、新しい考え方や趣味をもたらしてくれます。そうして自分自身の価値観、生き方が広がっていけば、人生が豊かになっていきます。私はこれからも、読書のジャンルの幅を広げていきたいと思っています。みなさんも、本の世界へ手軽な小旅行といきませんか。

編集後記

この図書館報は、昭和五五（一九八〇）年六月一日に創刊し、今年で四十二年目を迎えました。

毎年、新着任の先生方に原稿をお願いし、図書館報をつくっています。今年度は一六名の先生方に執筆していただきました。今年度も先生方のご協力のおかげで無事に図書館報を発行することができました。興味深い内容ばかりですので一読いただきたいと思います。それでは、新着任の先生方の寄稿をお楽しみください。

一学期は勉強をする場、読書の場として活用していただきました。「また行きたいと思える図書館」を目標に、引き続き図書委員と活動を続けていきます。毎月発行のLibraryも「楽しみにしています」というお声をいただき、図書委員の励みにもなります。ありがとうございます。

最後に、ご多忙な中、原稿執筆していただいた先生方、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。